

能界展望(平成二十五年)

著者	伊海 孝充
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	40
ページ	221-231
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/12169

能界展覧（平成二十五年）

伊海孝充

はじめに

この「能界展覧」を数年前から読み直して見ると、暗い話題から始まっていることが多い。名人たちの逝去・能楽師の減少・観客の減少・震災の影響・旧態依然たる能界への閉塞感など、能楽を取り巻く状況への憂いが記されている。残念ながら、本年も悲報から筆を起さなければならぬ。五月に長く狂言界を支えてきた狂言方大藏流の茂山千作氏が逝去した。能楽界における千作氏の功績を改めて紐解く必要はないだろうが、観客にこのうえなく愛されていた能楽師だっただけに、その喪失感は大きかった。

この数年、これまで能楽界を牽引してきた能楽師たちの死にたびたび接してきた。名人たちの訃報が重なると、どうしても能楽界の危機のようなものを想起してしまう。名人たちの喪失がただちに停滞に繋がるわけではないだろうが、能楽界全体が緩やかな下り坂を辿っているだけに、大きな存在を失ってしまうと、漠然とした不安を感じてしまうのである。

ただし研究者に言われなくても、この「下り坂」に危機感を覚え、実際に行動を起こしている能楽師も多い。「能界展

覧」はこうした行動を積極的に評価するような紙面でありたいと思う。そこで、本年において注目したいのは三月に国立能楽堂で開催された「第一回下掛宝生流・能の会」である。能会とはシテ方主催のものが大半を占め、ときに囃子方が個人で開催する会もあるが、ワキ方主催の能会ほとんどない。現行曲の中には「谷行」のように、ワキ方を揃えることが難しいがために、舞台にかかる機会が少ない曲もある。ワキ方が会を催すことで、こうしたワキ方が活躍する稀曲を見るというという楽しみが生まれる。本会はその期待に応えてくれるかのように、下掛宝生流としては三十年ぶりとなる「壇風」の上演となった。

ただしワキが活躍する稀曲を上演するだけでは、ワキ方が会を主催する意味はあまりないと思う。大切なのはそれらをとおして、ワキの存在を再確認すること、ワキの演技の可能性を探ることであろう。そういう点からも、今回の「壇風」は興味深い上演であった。とくにワキの阿闍梨（森常好氏）とワキツレの本間三郎（殿田謙吉氏）の間答は感情がこもった迫真の演技であった。こうした演技に対しては、「能ではない」という評価もあるかもしれないが、筆者としては、恩愛

滲むような場面の遣り取りはやりきってしまった方が舞台効果も大きいと思う。二者の対立の中で恩愛を描く問答は、歴史的に見ても縮小傾向にあり、比較的長い問答を持っていた曲も、江戸時代から削除される傾向にある。それは能の歌舞的要素が重要視されるなかで、問答の存在意義が希薄化していったためであろう。そのため、問答に感情を込めるような表現は、現在における理想的な能のイメージとはそぐわないものだと言える。だからこそ、本会のようにワキの演技の可能性を探る機会であれば、シテ方に気遣いをする必要もなく、能の表現からはみ出すぐらいの演技を試みてもよいのではないだろうか。

しかし、台詞の遣り取りに表現の可能性を探るのであれば、能という舞台芸術でなくともできる。小説・映画・演劇・ドラマなどが作り出す物語の方が、この点では能よりも自由度が高く、多様な表現ができる。こうした他芸術との比較の中で、能が問答の魅力を追求することに意味があるのかを考える必要もあるだろう。今回の「第一回下掛宝生流・能の会」は、こうした現代舞台芸術の中の能の存在を再考する機会であったという点で大変興味深いものであった。

その上で、一つ要望がある。それはこうした会を継続的に開催してほしいということだ。第一回からすでに三年過ぎていくが、いまだ第二回の情報を聞かない。運営面でも難しい問題があると思うが、一度だけではわからないことも多く、続けることでその価値が鮮明になっていくと思う。「第一

回」と銘打っているので、主催者にも二回目が念頭にあると思う。早く次を開催し、さらに回を重ねていつてほしいと願っている。

もう一つ、平成二十五年の能界において触れておかなければならない話題は、開場三十年を迎えた国立能楽堂についてである。以下、国立能楽堂事業の三本柱である《公演》《資料収集・展示》《養成》の面から振り返ってみたい。

《公演》

二十周年時と大きく変わったのは、チケットの取りにくさはだいぶ緩和された点であろう。時勢に合わせるようにインターネット販売が推進され、とくに若者たちにとって国立劇場全体がアクセスしやすくなった。

ただし、チケットが取りやすくなった背景には、能楽愛好者が減少していることもある。この問題に対応するためには、公演内容についても工夫が必要なはずである。従来から言われていることだが、公演の出演者に偏りがあり、そのため内容もマンネリ化している面もある。他の能楽堂では趣向を凝らした企画を立て、能楽愛好者だけでなく新たな観客の獲得を目指したような公演も行われている。国立能楽堂ではそれが能楽鑑賞教室にあたるのだろうか、この公演は長年大きな変更もなく続けられている感があるので、本当に能楽普及に寄与している催しなのか検討してほしい。

さて、三十周年記念公演は特別公演・記念公演の二本立て

になっていた(詳しくは後述の『記念公演・特別公演』参照)。後者の企画内容・出演者などは想像できたものであるが、特別公演については賛否があったのではないだろうか。ここでは、その中から二つの公演を取りあげたい。

一つはスーパード能「世阿弥」である。これは茂山家ともに「スーパード狂言」を手がけた梅原猛氏作の新作能で、演出は梅若玄祥氏が行なった。この能は世阿弥の佐渡配流・元雅の死に新解釈を加えた物語で、世阿弥生誕六五〇年を強く意識した作品だった。この能の内容についても様々な意見があるところだろうが、何が「スーパード」なのかを私的に解釈するのであれば、古語ではなく現代語で詞章が編まれている点、暗転など照明効果を多用する点、現代演劇のような大きな作り物(セット)も用いた点に特色があるので、能が現代劇の趣向に近づいたことが「スーパード」なのだろう。

個人的な見解を述べるのであれば、能の枠組みに囚われず新たな表現を追求する試み自体は好意的に受け止めたい。今も現代能・近未来能などと冠する公演があるが、これらを通して能の魅力を別の角度から見つめ直すことができるのなら、それは意味があることだといえる。ただし、「世阿弥」は委嘱作品であるとはいえないが、国立能楽堂三十周年記念の公演であるということを考えなければならぬ。

能舞台は幕がなく、照明は固定、最小限の舞台装置しか用いない空間である。その不自由さは能舞台の魅力と一体のはずである。「世阿弥」はその魅力を否定する上で作られてい

ることに国立能楽堂記念公演としてふさわしいか、という疑問をもってしまふのである。前述のとおり、照明の工夫をするなどの試みをすることは否定しないが、それはやってみたいと思う者達の責任の上で他の機会に上演すればよいことだろう。わざわざ国立能楽堂という能舞台の祝いの場で、能の空間の魅力を打ち消すような「演劇」をなぜ上演する必要があるのか理解に苦しむところである。

二十周年のときは瀬戸内寂聴作の「くちなわ」を上演したように、著名人に作品を依頼し、世間からの注目を集めるという意図が国立能楽堂にはあるのだろう。現にNHKで公演が放映されただけでなく、制作ドキュメンタリーまで放送されたのだから、能に注目を集める機会にはなっただろう。ただし、「世阿弥」が新たな試みの一つとしては評価できても、後代に残る名作であったとはいえないと思う。このような記念公演は単なる打ち上げ花火でよいのか、単なるお祭りでよいのか、五十周年に向けて今一度考えておきたいところである。

もう一つは片山幽雪氏がシテを勤めた「関寺小町」である。幽雪氏にとって三度目のシテであるという点も大きな話題となったが、国立能楽堂主催公演としては初めての「関寺小町」であったという点も重要であろう。

秘曲・稀曲は上演すればよいというわけではない。それが秘曲であると観客が実感するためには、充実した舞台であることが必須である。当日の幽雪氏の演技がそれに値したかは

評価が難しい。高齢ですでに全盛期の演技ができなかった幽雪氏の舞台からは、老女の演技というよりは演者自身の老いを強く感じてしまったからである。

筆者の周辺には、この舞台を好意的に評価する人もおり、「幽雪氏がこのような境地に達したのかと思うと感慨深かった」という声も聞いた。これを耳にしたとき、今回の舞台は〈能楽師・片山幽雪〉という長い文脈の理解がなければわからない世界であったのかもしれないという感想をもった。

古典芸能は演目ではなく一人の役者を観るという楽しみもある。ただし今回の「関寺小町」は「世阿弥」同様に国立能楽堂三十周年の催しとしてふさわしかったのか、国立能楽堂というパブリックな劇場のプログラムとしてふさわしかったのか、という点に懐疑的にならざるをえない。〈能楽師・片山幽雪〉を観るのであれば、幽雪氏を長年見続けてきた観客が集まるような会で三度目の「関寺小町」を演じたほうが、舞台と見所の一体感があると思える。国立能楽堂の記念公演であれば、「関寺小町」を観たい」と思って来場する観客もいるだろうし、その中にははじめてこの曲を観た観客もいただろう。その観客にとってよい舞台であったかは国立能楽堂側にも考えてもらいたいところである。

数年前、座席前の字幕画面の設置が問題となり、その是非をめぐる多くの発言が聞こえた。今回の三十周年の記念公演の内容はそれ以上の議論が巻き起こってしかるべきだと思う。国立能楽堂が劇場である以上、その設備だけでなく、何を誰

が上演するのかという劇空間の本質こそもっと議論されるべきではないか、ということを感じた三十周年公演であった。

《資料収集・展示》

資料展示は二、三回企画展と常設展という流れが定着している。企画展は毎回趣向を凝らした内容になっており、国立能楽堂の大きな成果の一つと評価できる。平成二十五年は法政大学能楽研究所設立六十周年記念共催「収蔵資料展」が前期「みちのくの能・狂言」（一月三十日まで）、後期「能絵鑑」（二月二十日～三月二十日）と二部構成で開催され、四月十九日～六月十三日の日程で企画展「世も盡きじ―三井家の能・暁斎の狸々―」（三井記念美術館・河鍋暁斎記念美術館との共催）で開催された。

また開場三十周年記念特別展示「能を彩る文化財」（九月十五日～十一月二十日）として、国立能楽堂所蔵の能面・装束の名品が展示され、併せて国立能楽堂開場三十周年記念特別展示列品講座「桃山時代の能装束に見る刺繍」（講師・岡田宣世。十一月十日）も行われた。筆者が展示を拝見したとき、「あまり三十周年に関係ない」という感想を漏らしていた観客もいた。そうした声が多いようであれば、能楽堂の三十年を回顧するような機会があってもよかつたかもしれない。公開講座は数年前から公演の解説から模様替えとなり、二十五年は公開講座「中世説話文学と能」（講師・藤島秀隆。二月二十日）、特別講座「描き伝えた芸能―『狂言古図』と『古狂言後素帖』」（講師・河野元昭・西野春雄・山路興造。

三月十五日)、世阿弥生誕六五〇年企画『観阿弥・世阿弥①⑤』(講師:竹本幹夫。四月二十四日・五月二十九日・六月二十一日・八月二十二日・九月十八日)の三つの催しがあった。講座はかわらず盛況のようであるが、国立能楽堂ならではの企画にも期待したい。

また平成十九年に第一号が刊行された『国立能楽堂調査研究』は、年一冊のペースで第七号まで続いている。国立能楽堂が収集した資料が、広く認知されるためにも貴重な紙面だといえるので、今後もこの雑誌の刊行が継続されることを願っている。

《三役養成事業》

三役養成事業も国立能楽堂の重要な柱である。平成二十五年度に八期まで終了し、合計二十八名の能楽師を輩出している。能楽師の家の子供が芸を継承しないこと、また高校・大学の能楽サークルの部員の減少の影響で、これまで能楽界を支えてきた若い力の源が枯渇しつつある中、この事業は今後ますます重要となるだろう。講師の方々のご苦労は並々ならぬものであろうが、この事業が継続かつ発展していくことは大げさに言えば能楽界全体にとっての生命線となるだろう。

少し気がかりなのは、八期の修了生が一名(小鼓方観世流)だけであったことである。おおよそ、各期五名程度でスタートし、三名以上の修了者を出してきたことを考えると、さびしい結果にも思える。技術・気力が足りない能楽師を輩出することは能楽界にとって弊害となるので、多ければ良い

というわけではないが、なぜそのような結果になったのは気がかりである。門外漢が口を出すべきことではないが、普段、大学生と接している経験から、これまでの徒弟制度的環境になじめない若者が多くなってきたという、教わる者たちの変化が少なからず影響しているのではないかと危惧している。

さまざまな催し

【記念公演・特別公演】

◎大槻能楽堂改築三十周年記念新春能

1月3日大槻能楽堂。(翁)(観世清和ほか)・(末広かり)(茂山千五郎ほか)・(二人静・立出一声)(シテ梅若玄祥)

1月4日大槻能楽堂。(翁・父尉延命冠者・三上山)(大槻文蔵)・(三本柱)(野村万作ほか)・(草子洗小町・替装束)(シテ観世清和)

◎なかのZERO二十周年記念新春能

1月27日なかのZERO大ホール。(石橋・大獅子)(シテ小島英明)・(末広かり)(野村萬斎ほか)ほか。

◎春秋座―能と狂言

2月2日京都芸術劇場。企画・監修渡邊守章。(融)(シテ観世鏡之丞)・(磁石)(野村万作ほか)。

◎国立能楽堂開場三十周年記念公演

【特別企画】

4月19日。スーパード能「世阿弥」(梅若玄祥ほか)。

5月29日。(関寺小町)(シテ片山幽雪)ほか。

11月1日。〈道成寺・古式〉（シテ金剛永謹）・仕舞（海人）

（近藤乾之助）ほか。

12月7日。〈釣狐〉（山本東次郎ほか）・〈太鼓負〉（野村万作ほか）ほか。

〔記念公演〕

9月15日。〈翁〉（観世清和）・〈楊貴妃・千之掛・臺留〉（シテ梅若玄祥）・〈萩大名〉（大藏彌太郎ほか）・〈土蜘蛛・千筋之伝・さがに〉（シテ金剛永謹）

9月16日。〈住吉詣・悦之舞〉（シテ大槻文蔵）・〈鶏聲〉（山本則俊ほか）・〈正尊・起請文〉（シテ金春安明）

9月17日。〈鶴亀・曲入〉（近藤乾之助）・〈羽衣・舞込〉（シテ友枝昭世）・〈庵の梅〉（野村萬ほか）・半能（石橋・大獅子）（シテ観世鏡之丞）

9月20日。〈夷大黒〉（三宅右矩ほか）・〈通円〉（茂山正邦ほか）・〈八尾〉（野村又三郎ほか）・〈祐善・古式〉（大藏千太郎ほか）・〈老武者〉（野村萬斎ほか）

◎今井後援会独立三十周年記念能

4月14日金剛能楽堂。〈安宅・延年滝流〉（シテ今井清隆）ほか

◎金春惣右衛門米寿記念桐星会別会

4月28日国立能楽堂。〈羽衣・和合之舞〉（シテ関根祥六）ほか

◎先代野村又三郎七回忌追善やるまい会

5月25日名古屋能楽堂。〈魚説法〉（野村信朗ほか）・〈法師ケ母〉（野村又三郎ほか）・〈蛭〉（野村万作ほか）・素囃子（酌之舞）・〈鬨罪人〉（野村萬ほか）

◎山本孝追善・茂山千作追善能楽座自主公演

8月28日国立能楽堂。〈葵上・古式〉（シテ観世鏡之丞）・〈花盗人〉（野村万作ほか）ほか。

◎喜多流大島能楽堂創建百周年記念能

12月22日喜多流大島能楽堂。〈木賊〉（シテ大島政允・半能（石橋・連獅子）（シテ塩津哲生）ほか。

◎金剛能楽堂開館周年記念公演

11月24日金剛能楽堂。〔翁・十二月往来〕（金剛永謹ほか）・〔羽衣・床几之物着〕（シテ金剛永謹）・〔石橋〕（シテ金剛龍謹）

【新しい会】

◎第1回下掛宝生流・能の会
下掛宝生流が主催する会。

3月27日国立能楽堂。〈壇風〉（シテ高橋章、ワキ森常好、ワキツレ殿田謙吉・野口能弘・森常太郎・野口琢弘ほか）。

◎第1回たんたん能

丹後・但馬地域に本格的な能を見る機会を作るため、「藤村好諷会」が立ち上げる。

6月15日京都府丹後文化会館。〈道成寺・赤頭〉（シテ観世喜正）ほか。

◎能楽研修発表会第1回青翔会

若手能楽師の日頃の研修の場として、名称を改めて設立。
6月10日国立能楽堂。〈シテ東川尚史〉ほか。

【復曲・新作など】

◎復曲能(巴園)

1月25日横浜能楽堂。同能楽堂企画公演「美の世阿弥・華の信光」第三回。平成18年2月5日大槻能楽堂自主公演での復曲を村上湛が演出し直す。復曲の経緯は、「復曲能(巴園)」の演出について」(「明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科」20号)に詳しい。

◎復曲能(橋天狗)

2月23日大槻能楽堂。同能楽堂のシリーズ「日本探訪」日本の歩んだ道・日本人の想い」の中の企画で、村上湛の全面的新案による演出。シテ多久島利之・大槻文蔵。

◎なごや妖怪狂言「冥加さらえ」

4月6日名古屋能楽堂。名古屋堀川ライオンズクラブ設立十周年を記念して。作家・やまかわさとみがご当地妖怪に取材して作成する。出演は野村萬斎・佐藤融・井上松次郎・野村又三郎ほか。

◎創作能(ジャンヌ・ダルク)

6月29日熊本県立劇場演劇ホール。熊本県立第一高等学校創立百周年記念として上演される。フランス三都市(昨年5月初演作)の再演。能本制作西野春雄、出演は狩野瑠璃・山本東次郎ほか。

◎復曲能「橋姫」

6月30日京都観世会館。第二回「復曲試演の会」として、「十番切異本・夜討曾我」とともに上演。(橋姫)シテ井上裕久。

◎復曲能「阿古屋松」

7月20日山形市民会館大ホール。第十五回山形能特別公演「復曲能『阿古屋松』を観る会」として上演。昨年四月に観世清和・松岡心平によって復曲された同曲の再演。

【海外公演】

◎グッケンハイム美術館三番叟公演

3月28・29日ニューヨーク。現代美術家・杉本博司と野村萬斎が演出した美術館空間での上演。

◎スロバキア「JAPAN WEEK 2013」

8月17・20日。ブラチスラバ・コシツェでの公演。山本能楽堂による。

◎韓国4都市狂言公演

11月12日。仁川・大邱・ソウル・済州での狂言公演。

【講座・展覧会など】

◎金沢能楽美術館「金沢能楽美術館コレクション 能楽宝尽くし」

1月2日～4月21日。祝意をテーマにした同美術館のコレクション展。

◎三井美術館「河鍋曉斎の能・狂言画」

4月20日～6月16日。幕末から明治に活躍した河鍋曉斎とその一門が描いた能楽関連画の展示。扇面画や貴重な下絵なども展示された。

◎彦根城博物館「近江と能」

9月20日～10月22日。近江を舞台とする「三井寺」「竹生島」「白鬚」などを取り上げ、近江と能の関わりを紹介する展示。

◎相国寺承天閣美術館「室町の花―観世宗家展―」

4月3日～5月26日。観阿弥生誕六八〇年・世阿弥生誕六五〇年を記念した観世宗家（観世文庫）・承天閣美術館所蔵品の展示。

◎公開講座「観阿弥生誕六八〇年・世阿弥生誕六五〇年記念〈世阿弥の能とこころ〉」

8月7日、朝日カルチャーセンター新宿校。観世清和と村上湛の対談。

◎世阿弥生誕六百五十年記念『世阿弥シンポジウム二〇一三』

9月2日、観世能楽堂。第一部「世阿弥 能『檜垣』と白拍子・乱拍子」小林康夫・松岡心平・沖本幸子・横山太郎。第二部「蘭拍子―能の舞いの古層」観世清和・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠。

◎「生誕一三〇年 野上豊一郎の能楽研究を検証する」

10月7日法政大学スカイホール。講演「能楽研究の開拓者 野上豊一郎」西野春雄、報告①「野上豊一郎の『戯曲的分析』の方法」伊海孝充、報告②「ワキの役割」小田幸子。

襲名・改名

シテ方観世流古川充氏は永島忠修氏の芸養子となり永島充

に改名した。6月23日に国立能楽堂で披露能が催された。

荣誉・受賞

◎名古屋市芸術特賞 佐藤友彦

◎芸術選奨 文部科学大臣賞 観世清和

受賞理由「本年、氏は三つの瞠目すべき能を主催した。『定家』では流儀の記録に名称のみ残る特殊演出「神神楽・露之組解」を他の習事と共に復興。聖なる皇女が身を縛られた妄執のドラマに、けざやかな明暗の対比を加えた。『江口』では至難な特殊演出「平調返」を最も整った形式で演じ、聖俗一体の光を放つ法悦境を格調高く表出。国立能楽堂の委嘱による復曲「阿古屋松」では世阿弥自筆本に自ら節付・型付を施し、「若さ」を渴望する老木の精の妖しい嫉視を浮き彫りにした。以上のどれも、個人の芸力と集団の要たる統率力とに支えられた演劇的精華である。」

◎日本芸術院賞 浅見真州

受賞理由「芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した『檜垣』をはじめ、近年の『道成寺』『安宅』、特に第六回日経能の「隅田川」はますますの充実した品格のある優れた舞台であった。また、異色の修羅能「重衡」、「道成寺」の原曲「鐘巻」、「常陸帯」などの復曲能は誠に意欲的な取組で能の伝承と創造の視点からも優れた舞台であった。数々の海外公演を通じて国際交流、文化交流に尽力しており、その思考と行動力は流派を越えて支持されるなど、その業績は顕著である。」

◎春の叙勲

旭日双光章

シテ方金春流 本田光洋

◎秋の叙勲

旭日小綬章

シテ方観世流 大槻文蔵

◎名古屋市文化振興事業団「芸術創造賞」 竹市学

受賞理由「江戸時代より名古屋に伝承されている藤田流の確かな演奏技術を継承し、優れた舞台成果をあげており、他ジャンルとコラボレーションや市民への能楽の普及にも積極的に取り組む姿勢からも、今後一層の活躍が期待される。」

◎京都府文化賞 茂山あきら

◎平成25年度(第68回)文化庁芸術祭新人賞(演劇部門)

茂山良暢(忠三郎狂言会における「二人袴」の成果)

受賞理由「明朗な発声と、素直で邪気のない大らかな演技によって、見事に愛嬌のある婿を演じた良暢は、忠三郎の芸風を真すぐに継承するものである。付き添い役を演じた善竹隆平、舅役の茂山七五三との掛け合いも絶妙で、今後の成長を確信させるものであった」

◎伝統文化ボーラ賞大賞 観世清和

◎文化長官表彰 山階弥次

受賞理由「永年にわたり、能楽師として活躍するとともに、後進の育成にも努めるなど、重要無形文化財『能楽』の保存、振興に寄与し、我が国の文化財保護に多大な貢献をしている」

◎第35回観世寿夫記念法政大学能楽賞

本誌第39号彙報参照

◎第24回催花賞

本誌第39号彙報参照

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》野村四郎

《常務理事》観世清和・亀井保雄・金剛永謹・豊嶋三千春・粟谷能夫・高安勝久・柿原崇志・山本東次郎

《理事》梅若玄祥・浅見真州・高橋忍・金春安明・武田孝史・喜多六平太・宝生閑・藤田六郎兵衛・観世新九郎・荒木賀

光・金春國和・茂山千五郎・野村萬斎

《監事》小林与志郎・櫻間金記

《顧問》西野春雄

【会員数】(平成25年度末)総数 464名

◎能楽協会(会員名簿)平成25年版(二〇一三)より)

【役員構成】

《理事長》野村萬

《副理事長》福王茂十郎・観世鏡之丞

《専務理事》本田光洋

《常務理事》武田宗和・香川靖嗣

國川純・高桑いづみ

喜多流大島能楽堂

《理事》上田貴弘・金井雄資・観世元伯・観世喜正・成田達志・前田晴啓・浅井文義・一噌隆之・井上裕久・大倉源次郎・大坪喜美雄・國川純・善竹十郎・種田道一・辻井八郎・寺井榮・廣田幸稔・森常好・山本章弘

《監事》大塚和成・中村元彦・大和滋

《顧問》観世清和・金剛永謹

【会員数】1280名

シテ	観世436	金春107	宝生207	金剛82	喜多46	小計880
ワキ	高安15	福王16	宝生26	小計57		
笛	一噌11	森田47	藤田4	小計62		
小鼓	幸31	幸清9	大倉16	観世7	小計63	
大鼓	葛野12	高安11	石井10	大倉10	観世2	小計45
太鼓	観世16	金春22	小計38			
狂言	大蔵74	和泉61	小計135			
支部別	東京607名	名古屋103名	北陸85名	京都152名	大阪161名	神戸48名
	九州92名	本部扱32名				

物故者

●藤城継夫

元わんや書店編集部。2月4日、老衰のため逝去。享年90。明治大学卒業後、長年にわたって雑誌『宝生』の編集部に勤める一方で、解説書など能楽関係図書を執筆。能の公演の解説などにも携わり、能楽の普及に尽力した。著書に『能楽今昔ものがたり』『能への招待』『写真で見る能の扮装』などが

ある。

●廣田隆一

シテ方金剛流。3月10日、右腎孟瘤のため逝去。享年89。大正12年、京都に生まれる。昭和28年より、弟・泰三とともに廣田後援会を主催し、平成15年までに百回もの公演を重ねた。昭和57年芸術祭優秀個人賞、平成元年京都新聞文化賞、同5年京都市文化功労賞、同年京都府文化賞特別功労賞など受賞。

●谷口正喜

大鼓石井流宗家代理。3月20日、心原性能塞栓症のため逝去。享年86。大正15年京都に生まれる。父谷口喜代三、叔父谷口幸治郎に師事。三寿会主催。平成9年双光旭日章叙勲、同12年京都市芸術功労賞受賞。

●島原春京

シテ方金春流。4月3日、腎尿管癌のため逝去。享年80。昭和7年、佐賀県生まれ。金春信高に師事。春京会主催。女性能楽師として初めて、文化庁主催芸術祭に参加した。

●分林弘一

シテ方観世流。4月9日、肺炎のため逝去。享年78。昭和9年、京都市に生まれる。片山博通・片山幽雪に師事。

●河竹登志夫

演劇研究家。5月6日、心不全のため逝去。享年86。大正13年、河竹黙阿弥の曾孫として東京に生まれる。歌舞伎をはじめとして様々なジャンルの演劇関係の著作を残す。早稲田大学名誉教授。昭和62年紫綬褒章、平成7年旭日綬章、平成12

年恩賜賞・日本芸術院賞、平成13年文化功労賞。

●清田弘

能楽研究家。5月16日、心筋梗塞のため逝去。享年80。諸著作に『演劇百科大事典』『能の表現』など。

●茂山千作

狂言方大藏流。5月23日、肺癌のため逝去。享年93。大正8年、京都市に生まれる。祖父二世千作および父三世千作に師事。大正13年「以呂波」で初舞台。昭和41年十二世千五郎、平成6年四世千作を襲名。昭和57年芸術選奨文部大臣賞、同60年紫綬褒章受章、平成元年重要無形文化財各個指定(人間国宝)、そのほか数々の賞を受賞。

●渡邊三郎

シテ方宝生流。7月24日、慢性心不全のため逝去。享年95。

大正6年、東京に生まれる。勲五等雙光旭日章受賞。著書に『雑草ひと筋の道』(わんや書店)。

●寛鉦一

大鼓方大倉流。8月30日、肺気腫のため逝去。享年82。昭和6年、名古屋に生まれる。永田虎之助に師事。平成12年に愛知県芸術文化選奨受賞。

●國枝良雄

シテ方観世流。8月29日、尿膜管癌のため逝去。享年79。昭和9年生まれ。佐野光太郎・生一左兵衛・山中義滋に師事。

●柴田英子

シテ方観世流。9月3日、肝硬変のため逝去。享年88。大正

14年、神戸市に生まれる。上野義三郎・上野朝太郎・上野朝義に師事。昭和63年に準職分に認定される。

●足立禮子

シテ方観世流。9月30日、心不全のため逝去。享年88。大正14年北海道小樽市に生まれる。大槻十三の取り立てで師範となり、観世喜之家に所属。昭和39年「道成寺」、同50年に「卒都婆小町」を被く。女流会華の座を設立。準職分。